

コレクション展 2014-1

○△□-美術のなかの幾何学的想像力-

2014年3月15日(土)～6月8日(日)

丸、三角、四角…幾何学的図形に着目し、作品を読み解く

本展は、美術作品に現れる幾何学的な図形に注目し、60年代から現代にかけての美術表現における重要な動向を交えながら、幾何学形の意味するところ、また新たな視覚言語を形成しようとするアーティストたちの試みを、当館のコレクションの中から紹介し、読み解いていきます。

○、△、□といった絵画や彫刻のなかに見られる幾何学的な形は、前衛芸術と切り離せません。伝統的な具象表現を転換する要素として現れ、現実世界の描写から離れて、それまでになかった視覚的言語を作り出そうとする試みのなかで用いられていきます。

幾何学的な形は世の東西を問わず、純粹さ、完全さ、知的で、均整のとれた理想形を象徴しています。絵筆に託して禅の精神や世界観を表した禅画では、円は悟りの境地や宇宙観を表すものでした。また、20世紀のはじめ、ロシアのカジミール・マレーヴィチ(1878-1935)は、対象を描くことにしばられない、究極に自由で、純粹に抽象的な絵画を描くことを追求し、絶対主義(=シュプレマティズム)に到達。その思考は正方形を描くことに凝縮されていきます。さらにアーティストたちは、幾何学的形態に哲学的な意味を込め、抽象的概念、モダニズムの思考と結びつけていきました。60-70年代には、美術作品の形態を根本的な形へとそぎ落とし、作品の置かれる場と、鑑賞者との関係性にまで還元される、ミニマルな表現が探求されました。素材を加工せず「もの」としての存在感を問うた「もの派」の作品にも幾何学的形態を見いだすことができます。

本展は様々な抽象表現世界を取り上げ、単純な形態が背後に持つ、革新的な意味合いと世界観に触れていきます。また抽象とは無関係に描かれた具象表現、身体表現や映像表現のなかにも、幾何学形や線を見いだす実験的な展示を試み、作品に秘められた幾何学的想像力を浮かび上がらせます。

●出品作家(一部) / 榎倉康二、遠藤利克、斎藤義重、菅木志雄、田中敦子、浜口陽三、山口長男、クリスト、リチャード・ロング、デニス・オッペンハイム、フランク・ステラ、李禹煥 ほか

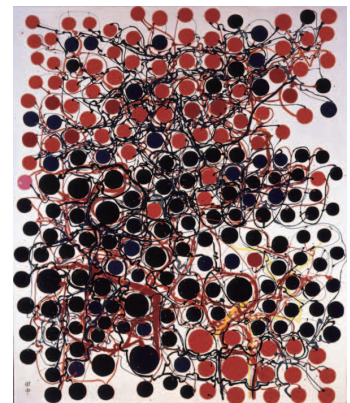
開催概要

- 【会期】 2014年3月15日(土)～6月8日(日)
 【開館時間】 10:00-17:00
 ※3月26日～30日、5月3日～6日は19:00まで開館延長
 ※入場は閉館30分前まで
 【休館日】 月曜日(5月5日を除く)、5月7日(水)
 【観覧料】 一般360(280)円[4月1日以降は一般370(280)円]、
 大学生270(210)円、高校生・65歳以上170(130)円
 ※()内は30人以上の団体料金 ※中学生以下無料
 ※5月3日【開館25周年記念】全館無料
 5月5日【こどもの日】高校生以下無料

広島市現代美術館(学芸担当:神谷 広報担当:後藤、鈴木)
 〒732-0815 広島県広島市南区比治山公園1-1
 TEL/082-264-1121(代表) FAX/082-264-1198
 E-MAIL/ hcmca@hcmca.cf.city.hiroshima.jp



遠藤利克《ロータス II》1989



田中敦子《作品》1959



ウーゴ・ムラス《フランク・ステラ》1964



菅木志雄《限界状況》1970